

あじびニュース

Fukuoka Asian Art Museum News
"Ajibi" is a nickname of the Fukuoka Asian Art Museum

Ajibi News

9

Vol.88

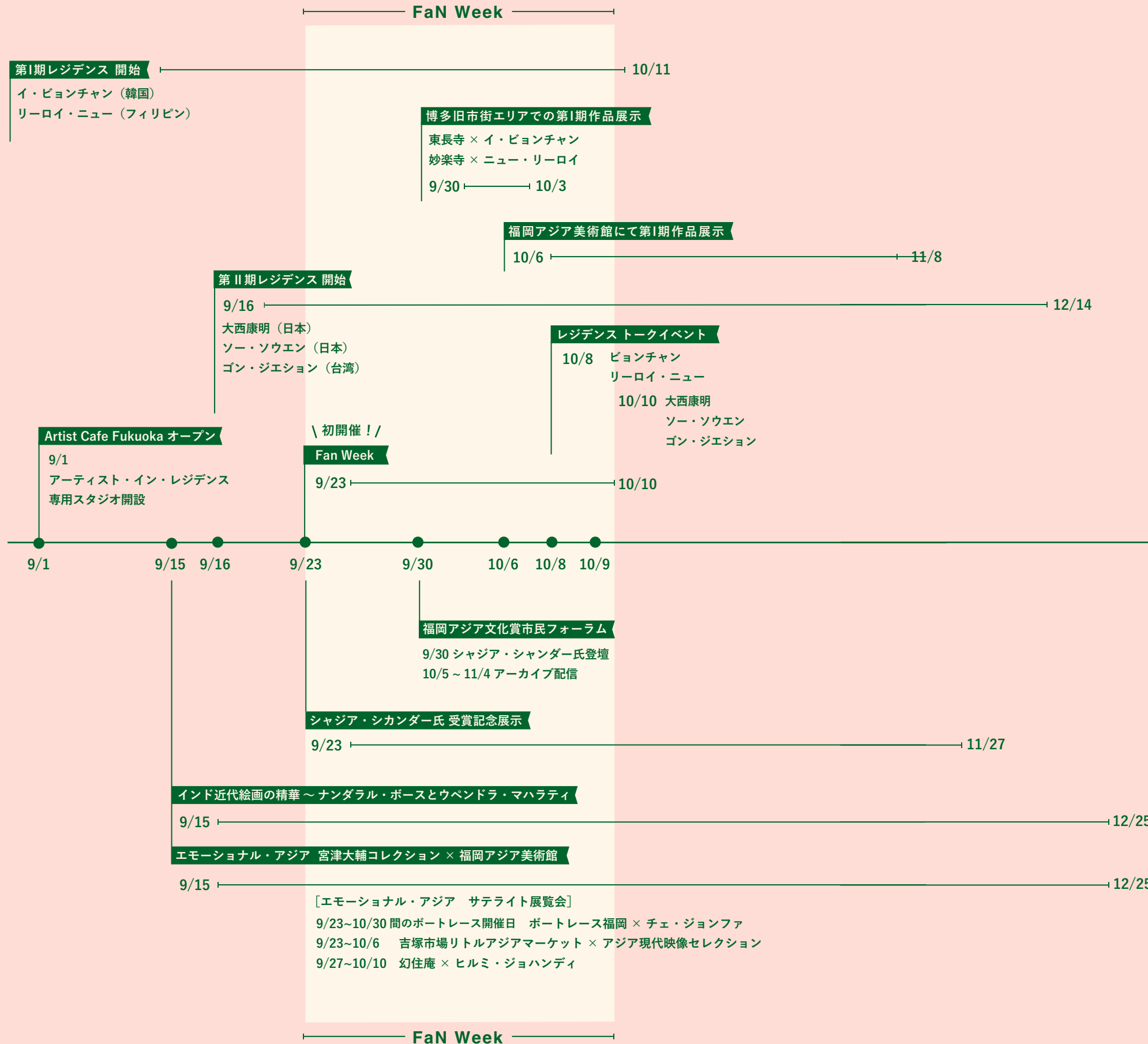
2022.September

イ・ヒョンチャン 《都市生物：霧への欲望》 2017 年



ウーロイ・ニュー 《船団》 2022 年

FUKUOKA
ART NEXT
ARTIST IN
RESIDENCE
EMOTIONAL
ASIA



Fukuoka Art Next

福岡市は2022年度から、福岡アジア美術館や福岡市美術館のこれまでの取り組みをさらに発展させ、彩りにあふれたアートのまちを目指し、「Fukuoka Art Next」をスタートさせました。市民がアートに触れる機会を増やし、その価値や魅力を感じてWell-beingを向上させるとともに、アーティストの活動を支援し、世界で活躍する福岡発のアーティストの増加を目指します。



Artist Cafe Fukuokaがオープン

旧舞鶴中学校南棟1階(中央区域内2-5)に9月1日にオープンしたArtist Cafe Fukuoka。同所はアーティストの制作スタジオや展示ギャラリーに加え、コミュニティスペースを設置し、アート活動全般に対する相談窓口の開設やアーティストと市民の交流イベント等を開催するアーティストの成長・交流拠点です。

“Fukuoka Art Next” Week (FaN Week)

セントラルパークエリアをはじめ、博多旧市街エリア、ウォーターフロントエリアなど街中の広域で実施する官民一体によるアート創出プロジェクト。初開催となるプロジェクトのチーフディレクターには、本号インタビュー誌面を飾るアートコレクターで横浜美術大学教授の宮津大輔氏が就任。

アーティスト・イン・レジデンス事業の拡充

福岡アジア美術館では、1999年の開館以来、アジアのアーティストを一定期間招へいし、福岡での創作活動や作品発表などのさまざまな機会を提供してきました。レンジデンス第Ⅱ期(9月~12月)からはアジアに加え国内外の招聘アーティストがArtist Cafe Fukuokaを拠点に滞在制作していきます。



レンジデンス第Ⅱ期アーティスト
(左から)
大西康明(日本)
ソー・ソウエン(日本)
ゴン・ジェション(台湾)

ARTIST IN RESIDENCE

今さらですが、 アーティスト・イン・ レジデンス事業って何？

福岡アジア美術館では1999年の開館以来、アジアの美術交流拠点になることを目指し、アジア諸国から美術作家などを招へいするアーティスト・イン・レジデンス事業を行ってきました。滞在制作はもとより、研究やワークショップ、展覧会、トークなどのさまざまな美術交流によって、地域の人々がアジアの美術や文化への理解を深める機会となってきましたが、2022年度に大幅なリニューアルを遂げました。その第I期(2022年7月ー10月)として、2名の美術作家が来福。滞在中に制作された作品は、博多旧市街エリアを舞台に9月30日から始まる屋外型アートイベントや福岡アジア美術館において発表されます。



イ・ビョンチャン 《生物》2019年



リーロイ・ニュー 《マニラのエイリアン》2015年

第I期レジデンス・アーティストの2人

Lee Byungchan
Seoul, Korea



イ・ビョンチャン

韓国・美術作家

1987年、韓国生まれ、ソウル在住。「平昌ビエンナーレ」や釜山現代美術館では、消費生活で大量に廃棄され、環境汚染や生態系の破壊などを引き起こしているビニールやプラスチック素材を用いて、それらを発光させ、動かすことにより都市の中に奇妙な情景を創り出す大型インスタレーションを発表。

Leeroy New
Manila, Philippines



リーロイ・ニュー

フィリピン・美術作家

1986年、フィリピン生まれ、マニラ在住。レディー・ガガのミュージックビデオ用の衣裳を制作するなど多方面で活躍。「第4回福岡アジア美術トリエンナーレ2009」では、当館入口に大型の彫刻を展示した今秋では、妙楽寺を舞台に、7月末から滞在制作してきたペットボトルによる大型のインスタレーションを実施。

滞在期間で制作した2人の作品がお寺に出現!?

歴史を感じる舞台でアート作品を展示する屋外型アートイベント。
今秋は、博多旧市街エリアに位置する東長寺と妙楽寺の2つの寺院に、2人の大掛かりな新作インスタレーションを展示。荘厳の空間に異彩を放つアート作品をご堪能ください。

| 展示期間 | 9/30(金)～10/3(月) | 入場無料 |

| ビニール袋を素材とする大型の立体作品! |

東長寺×イ・ビョンチャン

| ペットボトルによる圧巻のインスタレーション! |

妙楽寺×リーロイ・ニュー



▲ 妙楽寺での展示プラン



東長寺 福岡市博多区御所町2-4

妙楽寺 福岡市博多区御所町13-6

屋外展示を控える2名にQ&A

福岡滞在と作品制作を振り返って



リーロイ・ニュー

イ・ビョンチャン

Q1. あなたはどのようなアーティストですか？

また、作品制作にとって最大の関心事は何ですか？

イ・ビョンチャン

人生を理解するのに必要なのは資本と信頼、そして実質的な経験。だから商品や信仰、さらには物質的なものに関心を持って制作しています。

リーロイ・ニュー

とても好奇心が強い人間で、とくに自分の仕事以外について学ぶのが好きです。私の仕事は世界観の構築や神話作りと関係があって、それにはできるだけ多くの視点、経験、情報に触れることが大切です。最大の関心事は、自分の作品がよい意味で変容していくことです。

Q2. 3か月間、アーティスト・イン・レジデンスで外国に滞在することに どういう意味を感じますか？ ここで制作した作品については？

イ・ビョンチャン

私にとって海外での活動は、季節に合わせて着替える服のようなものです。私はソウルで疲れていました。まるで冷蔵庫に閉じ込められたスイカのように。外側はまともなのに、中味は腐っていました。だから脱出できてよかったと思います。今回の制作テーマは、プラスチックの生命体。皆さんもそうかもしれませんが、私は無神論者なのに銀行の前で信仰心が深くなります。それは都市で生き残るための必要最小限の信仰心とも言えます。東長寺の作品では、円滑な消費活動のために祈る対象となるものを作るつもりです。

リーロイ・ニュー

制作においては、私たちの現実の中にある廃棄物を集めて、「エイリアン」や「超自然」の別世界を創造したいと思っています。

Q3. 福岡ではどんな場所や店を訪れ、どんな人たちと交流しましたか？

イ・ビョンチャン

滞在中に足を運んだ場所で印象的なのはラーメン屋。松田聖子の曲を聞きながら豚骨ラーメンを食べたかったので、最近はずっとラーメンを食べています。また、個人的に詩人ユン・ドンジュ(※)が好きなので福岡刑務所に行ってみたかったけど、刑務所は観光地ではないので諦めました。今はまた別の歴史的な場所を探しています。

※ ユン・ドンジュ/ 中華民国時代の満州・間島出身の朝鮮民族の詩人。日本統治時代に朝鮮語で多数の詩を創作するも日本の刑務所において 27 歳で獄死。死後に『空と風と星と詩』などの作品が知られるようになった。

第II期のアーティスト3人も要チェック!

大西康明(日本)、ソー・ソウエン(日本)、ゴン・ジェション(台湾)
がArtist Cafe Fukuokaにて制作開始!

| 滞在期間 | 9/16(金)～12/14(水) | Artist Cafe Fukuoka |

レジデンス滞在作家の アーティスト・トーク

| 入場無料 |

10/8(土) 14:00- 会場: 福岡アジア美術館

第I期アーティスト

イ・ビョンチャン×リーロイ・ニュー

10/10(月・祝) 13:30- 会場: Artist Cafe Fukuoka

第II期アーティスト

大西康明 × ソー・ソウエン × ゴン・ジェション

リーロイ・ニュー

私の初めての日本体験は2009年の福岡でした。短い滞在にも関わらず、とても衝撃的だったのを覚えています。今回のレジデンスでは、より多くのことを経験したいと思っています。ユニークな料理の数々、街を散策するたびに迷い込む細い路地など、ここで出会うものすべてが何かを学ぶチャンスです。郊外もまた格別です。また、福岡の人たちが何かの意味を見出せるような作品を作りたいですね。新しい人脈や友人を作ることは常に重要です。

Q4. 近い将来に試してみたいことはありますか？ また、アーティストとしてこれからの夢や目標は？

イ・ビョンチャン

直近ではダイエツ。また今後は、海外での展示を多くやってみたいです。ただ私は、アーティストである前に平凡な人間なので、衣食住の問題が優先です。平凡な人間として幸せは周期的に巡ってきて、不幸は時々にしてほしいと思っています。

リーロイ・ニュー

私の作品を見た人が、そこから何かを感じたり、学んだりできることを願うばかりです。そのようなつながりが生まれるよう、最善を尽くしたいと思っています。

福岡の滞在をどう過ごしている!?

EMOTIONAL ASIA

宮津大輔コレクション × 福岡アジア美術館 エモーショナル・アジア展開催記念インタビュー

1990年代から国内外の現代アートを蒐集し、現在では日本のトップコレクターのひとりとして知られる宮津大輔氏のコレクションと当館所蔵作品を組み合わせ、現代のアジアの姿を映した東アジア、東南アジア地域の45作家の作品を紹介する展覧会「エモーショナル・アジア」。本展の開催とともに、ファンウィーク (Fan Week) のチーフディレクターに就任した宮津大輔氏に展覧会にかける思いをはじめ、自身のアートコレクションについてたずねました。



ファンウィーク (後掲) [台湾] オウゴン 2011年、宮津大輔氏所蔵
Yi-Hsin Tseng (Taiwan) *Ouygon*, 2011, Collection: Miyatsu Daisuke
©Yi-Hsin Tseng. Courtesy of the artist. Includes contemporary art.

福岡アジア美術館 (以下：ア) 世界的な現代アートコレクターとして数々の作品を所有する宮津さんが捉える現代アートとは、どのようなものを指すのでしょうか。

宮津 (以下：宮)

あたりまえと言えばあたりまえですが、「現代アート」にこれといった定義はありません。じゃあ「あなたはどう定義しますか？」と聞かれれば、私のなかでははっきりしています。結論から申しますと、現代美術とは私たちが生きている時代の同時代性を帯びた作品であることです。まず「美術」という言葉自体が造語であり、それは明治期にドイツ語の *“Kunst”* や英語の *“Fine Arts”* の翻訳などから考えだされた言葉といわれています。つまり、それまでは日本に「美術」という言葉は存在しなかったわけです。ましてや「現代美術」にいたっては、翻訳十造語あるいは翻訳です。ならば「現代美術の元は？」ということになります。それは誰もが知る英語のコンテンポラリーアート。ここでさらにコンテンポラリーアートとは何か？と問われれば、コンテンポラリーという形容詞は「現代の」という意味ですが、「同時代の」という意味もあります。そこで、われわれが生きている時代の同時代性 (何も声高に政治的なメッセージを訴求するような作品だけではありませんが) を有していなければ、ただ単に現代、あるいは現在作られただけの作品であって、いわゆる「CONTEMPORARY ART」の翻訳としての真の「現代美術」にはあてはまらない、というのが私の考えです。

ア：お答えに関連して、宮津さんご自身における「現代アートに触れる」とはどのような感覚でしょうか。

宮：現代アートの作品を求めるにあたっては、作家に会うべきであると思っています。なぜなら世界には多様な価値感があって、例えば、私はムスリムでもなければ仏教徒でもなく、生まれながらの男性性を自認する異性愛者です。そして私の住む日本は、民主主義の国であって、野党にも投票できるし、発言の自由も認められています。しかし、世の中には、一党独裁であるがゆえに野党が存在しなかったり、発言が制限されたりする国もたくさんあります。また、ムスリムもクリスチャンも、あるいは私たちが知らないさまざまな宗教に帰依している人たちもいます。当然国によっては経済状況も違えば、「多様な性」の「性」だけでなく、あ

らゆるものについて一様でない部分もあるでしょう。ですから、ある場所です生まれ育ち、あるいは移民として他の国や地域から来て、その環境のなかで暮らしているアーティストが、本人の目で見た (その国の) 現状を視覚的に作品化するのであれば、ぜひそのアーティスト本人に会ってみたい。もっと言うと、私がいくらゴッホやフェルメールのファンであっても、本人に会って話をすることはできません。しかし、草間彌生さんであってもゲルハルト・リヒターでも、実際にお目に掛かれれば話をすることができます。もしも、それが若手アーティストであったなら、一緒に食事やお酒を楽しむことすら可能です。そんな素晴らしいことは、アーティストが同じ時代を共に生きている現代アートにおいて、他にないと思うんです。ですから私は、同じ釜の飯を食って、もっとアーティストたちのことを深く知ったうえでコレクションしたいと思っています。

ア：では「触れる」に対して現代アートを「買う」とはどのような感覚ですか。

宮：アートをコレクションする面白さを何かに例えるとすれば、作品購入と人間関係は似ていると、私は思っています。それは愛情でも友情でもいいんですが、恋に例えるとわかりやすいかもしれませんが、恋に例えるとしたら、私が30歳にして初めて購入した草間さんの作品に対する当時の印象と、40歳または50歳での感じ方は違います。極端なことをいえば、それぞれが全く異なった作品のように見えていたわけです。作品は変わらないのに、観ている自分自身の変化が作品が映し出していたのではないかと思います。アート作品は金銭的な価値の有無だけではなく、自分が素晴らしいと思った、感動した作品と共に暮らすことで、自分自身の変化に気づかされるといった喜びもあります。

ア：アーティストと共同で建てた自宅に住まれ、過去30年間に蒐集した美術作品を専用倉庫に保管しているそうですが、宮津さんにとっての「アート蒐集欲」をかき立てる源は何でしょうか。

宮：実は一点でも多く所有したいという欲求は、それほど強いわけではありません。私がこれまで購入してきた作品のほとんどは、アーティストがまだ若く、評価が定まっていない時のものです。今や値が上がりつつある作品も少なくないのですが、一点たりとも売りに出したことはありません。それは、少しカッコをつけていえば、例え物理的な作品は売ることができても、友情や思い出は売れないと考えているからです。また、現在でこそ有名になって

いるアーティストたちも、私が作品を買った当時は、食うや食わずといった状態も決して珍しくありませんでした。こうした経験を見ると、自分があのアーティストを発見したとか、育てたとか、不適なことを言う人もいるのですが、私は自分の支払った幾ばくのお金、そのアーティストの晩ご飯とか画材の一部となり、もっと素晴らしい作品の制作につながってほしいと願っています。私自身のアート作品蒐集とは所有欲よりも、これほどいい作品を埋もらせたままではもったいないという、私なりの強い意思の表れです。無論、入手したからにはアーティストや彼らの作品の宣伝も大いにします。自分の好きなアーティストと、彼らの作品を世に広めることで、彼らが生きていくためのちょっとした踏切り板になれば嬉しい、というのが私にとってコレクションの原点かもしれません。こうしたことを、これまでの経験をとおして感じています。

ア：長年におよぶ宮津さんのアートコレクション、とりわけアジア作品の蒐集エピソードの一端を教えてください。

宮：1994年のコレクション開始から現在に至るもサラリーマンコレクター (現在は大学教員ですが、給与生活者であることには変わりありません) である私が、現代アートを求めてアメリカやヨーロッパに出かけるとなると、少なくとも一週間は勤務先を休まなければいけません。けれども対象がアジアのアーティストであったなら、金曜の午後に半休をとって午後便、あるいは夜中の便で日本を発ち、月曜の朝6時台の時間に羽田着の便で帰ってくれば、半休だけでそれ以上休まなくても済みます。そんなわけで、自然と私の足はアジアへ向いていきました。しかも、アジアは日本との共通点も多いけれども、似て非なるところが魅力です。東京とアジアの各都市とでは、流れている時間も、人間が歩くスピードも違います。郷に入れば郷に従えの言葉どおり、それぞれの土地が持つグループに身を任せることで、スマホやPCの画面で見えていた時とは異なる作品の素顔も見えてくるものです。

ア：いよいよ展覧会が始まります。宮津コレクションと当館コレクションを織り交ぜた4つの章で構成する本展ですが、ピックアップした作品に対するご自身の思い入れや、展示までのバックグラウンドをおたずねします。

宮：基本的には共同企画ということになるんですけど、福岡アジア美術館で行われる展覧会ですから、私としては福岡アジア美術館に対する敬意を表する意味でも、学芸員の趙さんと桑原さんのお2人に作品の選択については概ねをお任せし、自分が出しゃばることは控えました。お2人には主要な倉庫3カ所に来ていただいて、私がコレクションするアジア現代美術作品の大半を一点ずつ丁寧に観ていただきました。いくつかの作品については、簡単に説明もさせてもらいましたが、彼女たちの選ぶ視点、あるいは私と異なる作品の見方に触れ、「あ、そういうセレクションでこういうものを見せたいんだ」という新鮮な発見も多くありました。とはいえ、学芸員のお2人にとっては大変なリサーチであったと思っています。お仕事ぶりには、感謝しかありません。

ア：最後となりますが、本展の見どころとともに意気込みをお願いします。

宮：日本で初めて展示・公開される作品も少なくありません。また、海外においても最初の公開から20年以上が経っている作品もあるので、何かの資料で知っている、あるいは海外での展示や印刷物でしか見ていなかった作品に初めて触れるチャンスを楽しんでいたきたいと思います。アジア美術に興味をもっている方はもとより、アート全般に興味がある方にも満足いただける内容になったのではないかと思います。一方で今回は、若手学芸員の方に作品を選んでもらったので、彼女たちと同年代や若い世代のアート好きの方々にも、アジア現代アートの楽しさやカッコ良さ、あるいは鋭さみたいなものを伝えられたらいいですね。



【開催中】エモーショナル・アジア
宮津大輔コレクション×福岡アジア美術館
2022年9月15日 (木) ~ 12月25日 (日)
【観覧料】一般500 (400) 円 / 高大生250 (200) 円
／中学生以下無料 ※ () 内は20人以上の団体料金
※この料金で同時開催のインド近代絵画の精華展も
ご覧いただけます。



Miyatsu Daisuke

宮津 大輔

アートコレクター
横浜美術大学教授、森美術館理事

言葉を選びながらも、淀みなく自身のアートコレクションに対する愛情を語る姿は、文字どおりエモーショナル。

インド近代絵画の精華 ～ ナンダラル・ボースとウペンドラ・マハラティ



インド近代美術のパイオニアのひとりであるナンダラル・ボース(1883-1966)と、その次の世代として登場したウペンドラ・マハラティ(1908-1981)を紹介する展覧会。特に、ナンダラルは、20世紀前半、岡倉天心や横山大観ら日本画壇の重鎮らと交流し、急激な西洋化の波の中で、自国の美術が失われるかもしれないという危機感を共有しながら、西洋画よりも伝統的な表現や技法を重視したベンガル派の重要な画家として知られています。

開催期間

2022年9月15日(木)～ 2022年12月25日(日)

会場: アジアギャラリーB

観覧料: 一般500(400)円、高大生250(200)円、中学生以下無料

※この料金で「エモーションナル・アジア」展もご覧いただけます。

特別協力: 在大阪・神戸インド総領事館



ウペンドラ・マハラティ《アレクサンドロスの退却》
1940年、パトナー美術館所蔵

ニューデリー国立近代美術館とパトナー美術館の逸品！

本展では、ふたりの画業の一端をニューデリー国立近代美術館とパトナー美術館のコレクションで紹介するほか、福岡市所蔵の関連作品も展示いたします。ベンガル派や日本画壇の作家たちとの運命的な出会いから生まれたインド近代絵画の精華をご覧ください。



福岡アジア文化賞
FUKUOKA PRIZE

シャジア・シカンダー氏 受賞記念展示



2022年の第32回福岡アジア文化賞(芸術・文化賞)を、南アジアを代表するパキスタン出身の美術家、シャジア・シカンダー氏が受賞されました。これを記念し、福岡アジア美術館ではシャジア・シカンダー氏の作品3点を美術館7階ロビーと、Artist Cafe Fukuokaのギャラリーにて展示いたします。

開催期間 | 鑑賞無料 |

2022年9月23日(金)～ 2022年11月27日(日)

会場: 福岡アジア美術館 7階ロビー、Artist Cafe Fukuoka ギャラリー



シャジア・シカンダー《混沌の歓び》2016年

シャジア・シカンダー氏による「福岡アジア文化賞市民フォーラム」をアーカイブ配信でご覧いただけます。

ムガル朝の伝統に連なる細密画の世界を、今を生きる魅力的な造形として蘇らせたシャジア・シカンダー氏。第1部ではパキスタンから米国、そして世界へ。その軌跡とアートに込めた思いが語られます。第2部では、長年にわたり女性美術家の発掘と再評価を続けてきた美術史家・小勝禮子氏を加え、今日、多様な価値観に揺れる世界に、アートがどのように応えるのかを語り合います。

コーディネーター: 後小路 雅弘(北九州市立美術館館長)

シャジア・シカンダー氏
市民フォーラム
視聴申込受付フォーム



配信期間 10月5日(水)～11月4日(金) | 視聴無料 | 要申込(申込期間) 8月1日(月)～10月1日(土) |



福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

<https://faam.city.fukuoka.lg.jp/> TEL 092-263-1100
〒812-0027
福岡市博多区下川端町3-1リパレインセンタービル7・8階

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00(金曜・土曜は20:00まで)※ギャラリー入室は閉室30分前まで
開館時間 9:30-19:30(金曜・土曜は20:00まで)あじびホール、アートカフェ等
休館日 毎週水曜日(水曜が休日の場合はその翌平日) 年末・年始(12/26～1/1)

あじびニュースvol.88 2022年9月22日発行 企画・編集・発行:福岡アジア美術館 編集・執筆:瀬口賢一(コモン編集室) デザイン:長末香織 印刷:大同印刷株式会社